

持続可能な「課題探求能力」育成システムの構築に向けた 秘書科内学際合同研究

——平成23年度学内研究助成研究報告——

仁井 和彦・立花 知香・坂口 琢哉・大友 達也

A Report on Interdisciplinary Joint Development of Research Concerning
a Sustainable DIY Education System for FY2011

Kazuhiko NII, Chika TACHIBANA, Takuya SAKAGUCHI and Tatsuya OTOMO

はじめに

本稿は、平成23年度学内研究助成として選定された秘書科の取組に対して作成された報告書の要旨、抜粋である。

本研究は、平成20年10月～平成23年3月までに秘書科において実施された平成20年度文部科学省「質の高い大学教育推進プログラム」（取組名称「課題探求能力」の育成を目指す教育取組—教育課程と教育課程外諸活動を統合するDIY教育システムの構築—）の終了の翌年度に、更なるDIY教育システムの深化と発展に向け、標題の通り、秘書科内学際合同研究として、秘書科教職員全員が取り組んだものである。報告書は、本稿の筆者メンバー（仁井・立花：はじめに・申請内容・学生アンケート、坂口：学力向上委員会報告、大友：企業訪問報告）が取り纏め、科会において了解された。

申請内容は以下の通りである。

(1) 研究課題

持続可能な「課題探求能力」育成システムの構築に向けた秘書科内学際合同研究—平成20年度文部科学省「質の高い大学教育推進プログラム」選定秘書科取組の根幹であるDIY教育システムの深化と発展へ—

(2) 研究メンバー

仁井和彦（代表）、大下英蔵、大塚敬義、大友達也、橘野実子、坂口琢哉、立花知香、徳永彩子、長瀬徹郎、三宅重徳、藤井淑子（教務事務）

I. 本研究の申請内容（目的、方法、特色と独創性等）

1. 研究目的

(1) 背景

・秘書科は、学生の能力向上を目指した学科内の研究取組として、平成20年10月から平成23年

3月の30カ月間、平成20年度文部科学省「質の高い大学教育推進プログラム」に選定された「『課題探求能力』の育成を目指す教育取組」（副題：教育課程と教育課程外諸活動を統合するDIY教育システムの構築）に取り組んできた。

- ・上記取組は2年6カ月（30カ月）の試行錯誤の中で、所期の目的である成果を得ることができたが、反面、文部科学省に提出した取組の実践がまず優先し、時間的に持続可能＝再製可能な実践研究としての全体的な内実化の必要性を感じてきた。このような中、平成23年2月24日（木）文部科学省2名の実地調査において、「どこでもY」システムに対する関心は高く、本取組の深化、発展を期待する旨の発言があった。
- ・これらを踏まえ、下記の目的で研究を申請するものである。

(2) 目的

- ・「課題探求能力」育成を図るDIY教育システムを、①秘書科教職員全員で取り組む教育方法としての深化、発展に向けた持続可能性＝再製可能性あるものとして、②学生個々人が、在学中並びに卒業後も、「課題探求能力」の深化、発展に向け、持続可能性＝再製可能性ある姿勢を習得できるものとして、その確立を目指すものである。

①に関しては、

- ・教育における教職員相互の連携の在り方、秘書科カリキュラムにおけるビジネス・情報・英語・医療の分野間並びに分野別相関性とその修正・再編の要否、アクティブ・ラーニングの導入等を研究し、また、その実現を図る。

②に関しては、

- ・各学期ごとに学生個々人が教育課程、教育課程外諸活動における総合目標、及びビジネス・情報・英語・医療の分野別目標を設定し、その策定、実行、反省、行動のPDCAサイクルの自己評価シートの作成とその数値的把握を可能とする能力開発実践体系の確立を目指した研究を行い、また、その実現を図る。
- ・なお、教育GPでは「どこでもY」サブシステムと名付けたグループウェアを活用したが、本研究ではこの利用状況を踏まえた上で、運用維持費の発生しない新たなシステムへの移行を検討する。これによって経済性を確保すると共に、秘書科教育に合わせた機能や操作性の最適化を意図している。

2. 研究目的・方法

- ・研究計画・方法は、下記の通りである。なお、「どこでもY」サブシステムの代替となるシステムを検討・導入するまでの期間、本研究では引き続き「どこでもY」サブシステムを利用するものである。

前節1.(2)①について

- ・研究計画（方法）

第1段階：2年6カ月の取組実績を振り返り、深化、発展のために問題点を発掘する（春季休暇、前期）。

第2段階：現在のカリキュラムの適合性を、議論し、検討する（前期）。

第3段階：ビジネス・情報・英語・医療の分野別相関性の視点から、個別の科目内容について点検並びにアクティブ・ラーニングの導入等について、検討する。また、企業訪問（最大150社）を実施し、秘書科卒業生の勤務評価（業務取組姿勢、勤務態度、

対人折衝力、事務処理能力、情報収集能力等)のヒアリング調査を行い、企業サイドの視点から必要とされる分野別・科目内容について情報を収集し、分析する(夏季休暇)。

第4段階：カリキュラム・シラバスの修正・再編、アクティブ・ラーニングの導入について、結論を出す(後期・春期休暇)。

前節1.(2)②について

第1段階：学生個々人の教育課程、教育課程外諸活動における総合目標、及びビジネス・情報・英語・医療の分野別目標の策定、実行、成果、行動のPDCAサイクルの自己評価シートのトライアル版を作成し実施する(春季休暇、前期)。

第2段階：上記の実績を基に、分析し、修正版を作成する(夏季休暇)。

第3段階：修正版を基に実施する(後期)。

第4段階：実績を分析し、数値的把握を可能とする能力開発実践体系を確立するとともに、次年度の新版を作成する(春季休暇)。

3. 研究の特色・独創的な点

- ・DIY教育システムは、「研究目的」(背景)の項に記載しているように、文部科学省より特色ある独創的なシステムとして評価され、深化、発展が期待されている。本研究は、2年6カ月(30カ月)の取組実績を踏まえ、下記の点に特色、独創的な点がある。

(1) 学生の主体性を活かす教育方法の研究

- ・DIY教育システムは、学生が勉強したいという意欲を喚起させることによる勉学意識の向上、すなわち、「課題探求能力」の育成を目指す教育方法であるが、本研究は更なる深化、発展を実践的に追及する。

(2) 教育課程と教育課程外諸活動を統合した教育システム構築の研究

- ・教育課程と教育課程外諸活動との相乗効果による教育効果の向上を目指し、2年間の短期間に社会人としての基礎的知識、将来の継続的勉学姿勢の習得を期している。

(3) 秘書科教職員全員参加の学際合同研究

- ・ビジネス・情報・英語・医療の分野の教員の連携による学科全体としての教育システムの深化・発展への学際的視点からの研究である。

(4) 単なる理論研究ではなく、カリキュラム編成、授業方法等の実践的な研究

- ・研究論文を書くことが目的ではなく、その成果を具体的に実践することを追求する研究である。

(5) 持続可能な経済性ある教育システム構築の研究

- ・教育GPでは「どこでもY」サブシステムと名付けたグループウェアを活用したが、本研究では運用維持費の発生しないシステムへ移行し、これを実際に運用していくことで、教育システムの経済性と実用性の両立という観点からも有意義な研究である。
- ・2年6カ月(30カ月)の取組実績、並びに、(1)~(4)の研究を通して、本教育システムを持続可能な、複製可能性のある教育システムとして、21世紀の高等教育機関として短期大学の新しいモデル構築を目指す研究である。

4. 研究成果の発表の方法

論文発表，次年度以降における実践

5. 最近発表した論文・著書等名（参考文献の項参照）

II. 研究の成果

（概要）

本研究は，I章2項の要領で，基本的に行われた。成果については，研究目的内容の性質から判断は難しいが，次項以降，当年度卒業生のアンケート，学力向上委員会報告，企業訪問報告に見る通り，然るべき水準の成果を得ることができたと判断している。具体的には，次項以降を参照したいが，研究成果の概要は以下の通りである。

1. 学生アンケート

学生の視点から見たDIY教育の成果を得るために，アンケート「秘書科2年間を振り返って」を実施した。回答総数は114で，2年生（平成23年度卒業生）全員からの回答を得た。6つの質問からなるアンケート調査である。回答結果は付属資料を参考されたい。結論として，「大学諸行事・就職活動に力を入れ，マナー，社会人としての意識や考え方，コミュニケーション能力，自主性・積極性に成長を見出し，普段の授業，諸行事，教職員との個別相談や触れ合いが成長をサポートした」をアンケート回答に見ることができる。

総括として，2年間を振り返っての自己評価（Q6.最後に，秘書科2年間における自分自身を，10点満点で評価してください。）は下記表1の通りである。

表1 自己評価

	1点	2点	3点	4点	5点	6点	7点	8点	9点	10点	無回答	平均
計	1	0	1	1	6	11	40	30	9	13	2	7.46

秘書科2年間の学生自身の評価である。この平均点7.46をどのように判断するかは難しい。もっと頑張れたのという後悔から来ているもの，12月16日の時点で既に就職内定を得て，取り敢えず，よかったと評価する学生，等々あろう。

上記から総合的に判断すると，DIY教育は学生に十分に受け入れられ，学生生活を豊かにし，将来への展望をサポートするものと判断する。

2. 学力向上委員会報告

学力向上委員会が2011年度に取り組んだ「秘書科共通テスト」「特別講演会」および「個人面接練習」について，概要と来年度への課題をまとめた。

このうち「秘書科共通テスト」については，就職試験への対応および学習結果の可視化を課題とし，SPI形式の導入や得点分布の開示などを行った。一方「特別講演会」については，講演者と気軽に対話できる「懇話会」を新たに設け，学生の主体的な参加を促した。更に「個人面接練習」は例年2～3月に実施される集団面接練習の前段階的な役割として位置づけられ，学生が段

階的に自己分析を行う上で一定の成果を得た。

来年度の課題として、カリキュラムを体系化し、学生が入学から卒業までの学習を計画的に行える環境を構築すること、またその過程で得た知識を卒業以降も定着させ、自らの専門性に対する自覚を持つための指導が挙げられる。

3. 企業訪問報告

秘書科企業訪問は、過去3年間の秘書科卒業生が就職した実績企業より、秘書科卒業生にたいする評価を人事担当者等から聞きとり、今後の秘書科教育のあり方を検討することを主たる目的としたものである。

秘書科生が今後も就職していくと思われる金融、医療、サービス、製造、小売・販売等の5分野にたいして計89件訪問調査を行った。訪問を実施した教員数は11名、平均1人あたり9.5件の訪問で、広島市内、福山、尾道、三原、呉、東広島、三次など県内を広範囲に渡って訪問した。

卒業生評価では概して業務への基本的取り組み姿勢がまじめであり、懸命に努力している姿勢が高く評価され、挨拶等のマナーなど秘書科ならではの評価が非常に高い。専門的な知識や応用的な能力に関しては、高い評価は得られなかったが、卒業後5～10年程度の長期の期間を経てスキルアップできる性質であるため、今後の調査の課題とした。DIY教育の評価については、多くの企業・医療機関の人事担当者から、DIY教育について期待されており、高い評価を得ていることを確認できた。

Ⅲ. 個別報告（抜粋・要旨）

1. 学生アンケート

学生の視点から見たDIY教育の成果を得るために、アンケートを実施した。回答総数は114件で、2年生（平成23年度卒業生）全員からの回答を得た。アンケート結果は以下の通りである。

Q1. 2年間の生活で、もっとも力をいれたこと1つだけ選択してください。

表2

項 目	計
(1) 普段の授業	12
(2) 授業以外の勉強	10
(3) 学友会・サークル活動	2
(4) 大学行事	35
(5) 就職活動	34
(6) アルバイト	18
(7) その他	1
(8) 無回答	2
総 計	114

本質問では、普段の授業（68）が他項目の2倍以上である。Q1の結果と一見矛盾するのではないと思われるが、やはり学生の本分は授業からとの意識があり、これに続く、各種行事への参加（30）、ジョブカフェ・面接練習（24）、まほろば教養ゼミ（21）、教職員との個別相談や触れ合い（20）、BETA（16）、資格対策（15）の順との組合せが成長をサポートしていると判断すべきではないと思われる。共通テスト・夏休み課題（8）は、学生からすれば、強制的であり、主体的な取組になりにくい項目の性質から来ているのではないか。

Q4. 秘書科のサポートについて、意見や感想があれば記入してください。

就職活動における教職員のサポートを挙げるものが多い。この点、普段の授業、BETA、面接練習等を通じて、学生と教職員との近さに由来するものであり、DIY教育の実践から、教職員との接触機会の多い点にあると判断する。

Q5. まほろば教養ゼミについて、今後扱ってほしい内容があれば記入してください。

記載なし。

Q6. 最後に、秘書科2年間における自分自身を、10点満点で評価してください。

表6

	1点	2点	3点	4点	5点	6点	7点	8点	9点	10点	無回答	平均
計	1	0	1	1	6	11	40	30	9	13	2	7.46

秘書科2年間の学生自身の評価である。この平均点7.46をどのように判断するかは難しい。もっと頑張れたのにという後悔から来ているもの、12月16日の時点で既に就職内定を得て、取り敢えず、よかったと評価する学生、等々あろう。

2. 学力向上委員会報告

学力向上委員会では、秘書科において要求される学力を「(A) 基礎学力」「(B) 専門性」「(C) コミュニケーション能力」「(D) 課題探求能力」「(E) 人生観・職業観」「(F) 礼儀・マナー」の6つに定義した上で、各年度に応じて重点課題を設定し、改善・実践を重ねている。2011年度は特に (A)、(C) および (E) を重点課題に位置づけ、(A) の対策として「秘書科共通テスト」、(C) の対策として「個人面接練習」、また (E) の対策として「特別講演会」にそれぞれ言及し、改善案を検討しつつ実践を行った。

(1) 秘書科共通テスト

秘書科共通テストの目的は、前述したとおり基礎学力の向上にある。その実施プロセスは図1に示すとおり5つのステップから成り、これを一年間で計4回実施する。

下記のうち(1)については、担当教員がその都度内容を考えて出題しており、学生に必要な基礎学力に関する定義が曖昧なままであった。また(4)については教員間で結果を共有するものの、特に有効な活用は検討されていなかった。本年度はこれらに言及した結果「就職試験に対応した体系的な出題」および「試験結果の可視化・公開化による学習意欲の向上」の2点を改善・

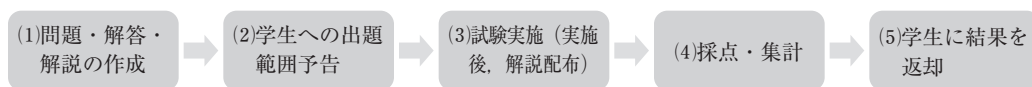


図1 秘書科共通テスト実施プロセス

実践することとした。

前者については、第2回、第4回の試験問題においてSPIやwebテストに言及し、これらの出題スタイルに沿って作成した。同時に秘書科の予算から、これらに関する問題集を計9冊購入して7408教室に常備し、更に出題予告において問題集のページ数まで細かく指定することで、学生の予習を促した。一方後者については、これまで非公開としていた各回の平均点や偏差値、最高点を開示することで、学生が相対的な順位を把握できるようにし、前年度より配布している解説集と併せて、学生の学習意欲向上を促した。

なお、今年度実施した全4回の秘書科共通テストの実施結果を、表7に示す。表中各欄左側が平均点、右側が最高点を表している。

表7の結果において、特に第2回試験での平均点の低さが目立ち、試験問題をSPI形式にしたことによる学生の対応不足が伺える。一方、同様の出題スタイルで実施した第4回試験では平均点の上昇が認められ、学生の学習意欲向上に対し一定の効果が示唆された結果となった。ただし、これらは出題内容や難易度などの差異に起因している可能性があり、単純比較は難しい。実践の成果を正しく議論するためには、一定の条件下での比較や多角的な評価指標が必要であり、これらについては今後の検討課題である。

表7 秘書科共通テスト実施結果(平均点/最高点)

	第1回(5教科) (4/21実施)	第2回(SPI) (7/7実施)	第3回(5教科) (9/29実施)	第4回(SPI) (1/12実施)
1年生	40.3点/79点	29.2点/65点	35.9点/62点	42.8点/70点
2年生	45.4点/80点	29.8点/67点	36.3点/80点	43.3点/87点
全体	43.2点/80点	29.7点/67点	36.1点/80点	43.0点/87点

(2) 個人面接練習

個人面接練習は、学生のコミュニケーション能力、特に就職面接における自己表現能力の向上を意図して、今年度より実施された。同問題に対する秘書科の体系的な取り組みとしては、これまで主に1年生の春休みに行う「集団面接練習」があったが、短期間で一斉に実施するスタイルでは、準備不足の学生に対して十分なフォローが出来ない問題があった。そこでこの点を補完し、学生が時間をかけて自己分析・自己表現の準備を行うためのしくみとして、個人面接練習の機会を新たに導入した。

具体的には、これらは9/26(月)~11/4(金)および11/7(月)~12/16(金)の2回に分けて行われた。各学生にはチューターを含む2名の担当教員を割り当てた上で、オフィスアワーなどの時間を利用して1対1の模擬面接を行った。面接内容は自己PRや大学時代の経験・成長などの説明であり、面接実施後は担当教員の指導を踏まえ、自己分析や自己表現の方法をブラッシュアップすることとした。こうした取り組みを体系的に進めた結果、学生が早い段階から自己分析を推し進め、その後の集団面接練習を高いレベルで実施できた。

なお、本取り組みに参加した学生者数は延べ218名、参加率は95.6%であり、初年度かつタイトなスケジュールであったにもかかわらず高い実施率を残すことができた。ご協力いただいた先生方に、この場を借りて感謝申し上げます。

(3) 秘書科特別講演会

秘書科特別講演会は、「まほろば教養ゼミ」の授業時間を利用して年に3回実施される。それぞれ企業のトップ、秘書科卒業生、就職活動を終えた秘書科2年生が講演を行い、学生自らが働くことの意味を考え、職業観を養うことを目的としている。特に2年生の講演に関しては、就職活動を間近に控えた1年生にとって非常に身近で具体的な内容であり、学生アンケートなどからも例年高い人気がうかがえる。一方で「講演」という形式を採用しているため、講演者と聴講者との物理的・心的距離が遠く、身近な上級生であるにもかかわらず気軽に質問できないという問題点があった。

そこで今年度からの新たな取り組みとして、第2回、第3回の講演後の時間に「懇話会」を設置した。これは講演者に対して、学生が自由な雰囲気の中で質問できる場を提供する試みであり、結果的にインタラクティブなやりとりが実現し、学生が自らの進路についてアクティブに考えるきっかけになった。また、懇話会の会場を「一般事務」と「医療」の2つに分けた事で、それぞれの職種に特有の職場環境や就職活動の方法など、より深い議論ができた。全体的なスケジュールの調整や教室の確保など事務的な問題は残っているものの、懇話会については来年度も継続することで、学生が共に進路を考えるための環境を提供していけたらと考えている。

3. 企業訪問報告書（企業サイドから見た秘書科卒業生を見る眼）

学生が就職する職業現場から見たDIY教育の成果を得るために、訪問インタビュー調査を過去3年間の秘書科卒業生が就職した企業、病院等を対象に実施した。質問項目は大別すると2種類に分けられる。第1に卒業生の能力評価に関する質問、特に意欲（基本的な勤務態度、業務への取組姿勢、学ぶ姿勢）、社会性（コミュニケーション、マナー、女性としての品格）、基本能力（教養、事務処理能力、情報収集能力、業務にたいする理解力）、応用的適応能力（応用力、忍耐力、洞察力、企画力）、知識（資格、専門的な知識）のうちどのような能力を評価されているか分析する。第2に秘書科DIY教育についての企業側の評価である。全訪問件数89件のうち、有効回答データ件数86件の分析を行った報告書よりデータを加工したものを以下の通り示す。

Q1 秘書科卒業生の特に良い点は何ですか？

表8

	土木・製造 28件	卸・小売 20件	金融・保険 11件	サービス 16件	医療 11件	全体 86件
勤務態度	19 (67.9)	10 (50.0)	8 (72.7)	11 (68.8)	6 (54.5)	54 (62.8)
取組姿勢	18 (64.3)	11 (55.0)	8 (72.7)	11 (68.8)	7 (63.6)	55 (64.0)
学ぶ姿勢	12 (42.9)	18 (40.0)	9 (81.8)	7 (43.8)	2 (18.2)	38 (44.2)
コミュニケーション	18 (64.3)	8 (40.0)	5 (45.5)	9 (56.3)	2 (18.2)	42 (48.8)
マナー	17 (60.7)	8 (40.0)	11 (100.0)	10 (62.5)	3 (27.3)	49 (56.9)

品 格	6 (21.4)	3 (15.0)	3 (27.3)	2 (12.5)	2 (18.2)	16 (18.6)
教 養	5 (17.9)	2 (10.0)	3 (27.3)	4 (25.0)	2 (18.2)	16 (18.6)
事務的能力	14 (50.0)	6 (30.0)	10 (90.9)	5 (31.3)	1 (9.1)	36 (41.9)
情報収集力	4 (14.3)	3 (15.0)	3 (27.3)	3 (18.8)	1 (9.1)	14 (16.3)
業務理解力	13 (46.4)	7 (35.0)	5 (45.5)	5 (31.3)	2 (18.2)	32 (37.2)
応用力	4 (14.3)	5 (25.0)	5 (45.5)	4 (25.0)	0 (0.0)	18 (20.9)
忍耐力	4 (14.3)	4 (20.0)	3 (27.3)	4 (25.0)	1 (9.1)	16 (18.6)
洞察力	1 (3.6)	2 (10.0)	3 (27.3)	3 (18.8)	0 (0.0)	9 (10.5)
企画力	2 (7.1)	2 (10.0)	4 (36.4)	2 (12.5)	0 (0.0)	10 (11.6)
資 格	2 (7.1)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (9.1)	3 (3.5)
専門的知識	4 (14.3)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	4 (4.7)

平成23年度企業訪問報告書より作成

〈表8の見方〉

企業訪問時に人事担当者へ「秘書科の卒業生で特に優れている点は何ですか」という質問¹⁾を行い、その回答内容を分析し、「勤務態度」、「業務への取り組み姿勢」、「学ぶ姿勢」、「コミュニケーション」、「マナー」、「女性としての品格」、「教養」、「事務的能力」、「情報収集力」、「業務理解力」、「応用力」、「忍耐力」、「洞察力」、「企画力」、「資格」、「専門的知識」のいずれかに該当すると判断し、回答件数としてカウントしている。()内は%表示で、分野毎の回答割合を示す。

意欲に関わる「勤務態度」(62.8)、「業務への取り組み姿勢」(64.0)、が5つの分野において一般的に高い評価を得ている。社会性に関わるマナーに関しては土木・製造(60.7)、金融・保険分野(100)において高い評価であった。特筆することとして、金融・保険分野では100%の評価となっており、卸・小売(40.0)、医療分野(27.3)の評価と比べ特に高い評価があるといえる。基本能力となる「教養」、「事務処理能力」、「情報収集能力」、「業務にたいする理解力」、応用的適応能力である「応用力」、「忍耐力」、「洞察力」、「企画力」、知識への評価として所持している「資格」、「専門的な知識」への評価などは総じて前掲した基本能力、社会性と比べ評価は高いとはいえない²⁾。

秘書科卒業生評価の特徴としては、第1に、真面目であるということ。意欲があること、特に勤務態度や業務への取り組みといったように、仕事に対するまじめな姿勢が評価されている。第2に、社会性があること。挨拶や言葉遣いなどのマナー、コミュニケーション能力、回答者のなかには会話する力だけではなく、会話に関わった気配り上手な点を評価している。第3に、事務的能力への評価がみられ、授業等で習得された実務的能力である可能性がある。

課題として考えられる点として、資格や専門知識についての能力への評価が企業側から多くなかった点については、秘書科教育の在り方等検討する必要があるかどうか追跡調査を行う必要が

1) 訪問時には「秘書科の卒業生で特に悪い点は何ですか」という質問をしているが、回答件数が極めて少ないため、本稿では表としてデータを示さず略している。また「全体的にみて秘書科卒業生はどうか」の質問もしている。これに関しては総じて良いという回答を得ている。

2) 付け加えておくこととして、「特に悪い点は何か」という質問にたいする回答が特にみられなかったため、悪い評価であるということにはならないと考えられる。

ある。また、企業の応用的適応能力については、訪問した企業・医療機関側の評価から卒業1、2年程度では分かりにくく、ある程度経験を積まなければ身につくものではないと考えられており、この評価については経験年数を考慮した調査が必要であると考えられる。

Q2 秘書科 DIY 教育について、どう思いますか？

表9

	分野毎 企業数	良い評価	%	悪い評価	%
土木・製造	28	18	64.3	0	0
卸・小売	20	6	30	0	0
金融・保険	11	10	90.9	0	0
サービス	16	10	62.5	0	0
医療	11	5	45.5	0	0
計	86	49	57	0	0

平成23年度企業訪問報告書データ

〈表9の見方〉

訪問時に秘書科 DIY 教育について、訪問者が予め説明しておき、卒業生をみて効果の有無を回答してもらう。回答された内容から「良い評価」、「悪い評価」に割り当てた結果が上記の表である。

秘書科 DIY 教育への評価は総じて57%が良いという評価を得ている。特に土木・製造（64.3）、金融・保険（90.9）、サービス分野（62.5）が高くみられた。

回答者のなかには、DIY 教育への今後の継続、効果の期待に関する発言が多く見られた。

参 考 文 献

〈本研究関連〉

- 1) 仁井和彦「『プロジェクトワーク』取り組みにおける一考察—産学連携プロジェクトの進め方と女子短期大学の今後—」『安田女子大学紀要』第34号, 2006, p. 121-128
- 2) 仁井和彦, 吉田行宏, 立花知香「『課題探求能力』の育成を目指す DIY 教育システム—愛されて20年秘書科の挑戦—(最近の試み)」『安田女子大学紀要』第37号, 2009, p. 265-277
- 3) 仁井和彦, 吉田行宏, 立花知香「体験を内面化し、定着させるための試み—安田女子短期大学秘書科の教育プログラム」『ヒューマンスキル教育研究』秘書サービス接遇教育協会, 第17号, 2009, p. 62-68
- 4) 橘野実子, 立花知香, 三宅重徳「学科公開講座における学際的アプローチ—名スピーチをコミュニケーションに活かそう!—」『安田女子大学紀要』第38号, 2010, p. 43-50
- 5) 仁井和彦「教育 GP 取組プログラムの進捗報告と教育課程科目における実践事例報告—教育 GP「課題探求能力」の育成に関連した必修科目「経済学概論」の授業実践—」『安田女子大学紀要』第39号, 2011, p. 223-233
- 6) 仁井和彦・立花知香「『課題探求能力』の育成を目指す DIY 教育システム—教育 GP 取組プログラムの30ヶ月の活動報告—」『安田女子大学紀要』第40号, 2012, p. 307-317

〔2012. 9. 27 受理〕